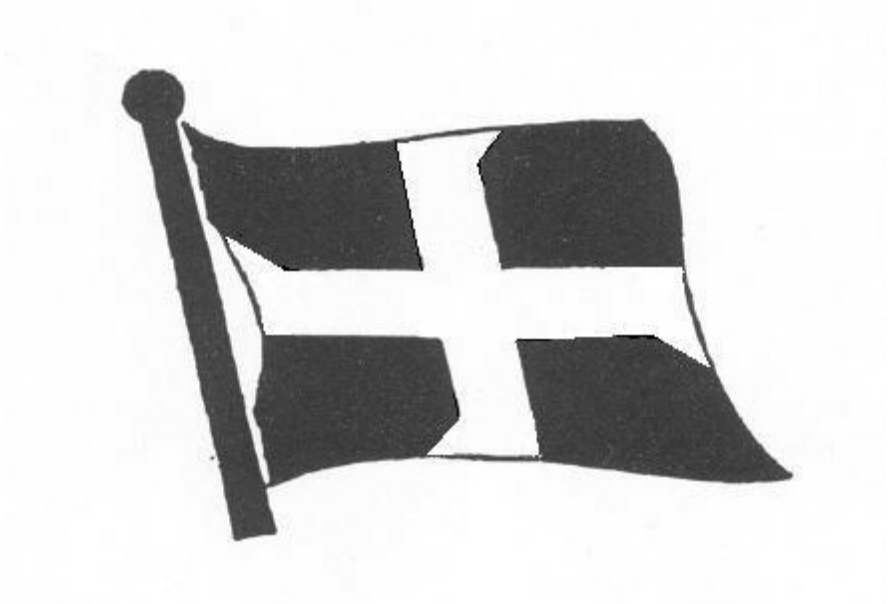
蒼穹 NEWS

No.6

東大戦総括号

令和6(2024)年10月03日発行



－目次－

①主将挨拶・女子主将挨拶・監督挨拶
②東大戦結果
③東大戦各競技総括
④その他ご報告

①主将挨拶・女子主将挨拶・監督挨拶

《主将挨拶》

去る 9 月 27 日に山城総合運動公園陸上競技場にて東大戦が行われました。男子は 190 点で優勝、女子は 37 点で優勝という結果をおさめ、見事男女総合優勝という目標を達成することができました。

目標の達成については本当に喜ばしい限りです。しかしながら男女とも事前予測から大きく差を詰められる展開となり、チームの詰めの甘さが露呈してしまったと感じます。連覇が続く中点を守り切ることはプレッシャーもあり難しいかもしれませんが、それもまた強さだと思います。ただただ記録を出すだけでなく、そういう面でもまだまだ課題があると感じた 1 日になりました。

そして東大戦を以て主将としての役目を終えることとなりました。この 1 年間皆様のおかげで、1 人では見られないような景色を沢山見させて頂きました。皆様の支えなしでは駆け抜けることのできない 1 年でした。心より最大限の感謝を申し上げます、本当にありがとうございました。

これからチームは主将松井と女子主将平松を中心とする新体制となります。彼らなりの味を出しながらチームを巻き込んでいくのが楽しみですし、また彼らを全力でサポートしていくつもりでいます。今後とも京都大学陸上競技部への応援を、何卒よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、蒼穹会の皆様におかれましては、ご多忙の中ご声援を賜りありがとうございました。そして一年間、日頃より我々の活動へのご支援、ご協力を下さり、本当にありがとうございました。今後とも変わらぬご支援・ご声援の程を何卒よろしくお願い申し上げます。

京都大学陸上競技部主将　中川　遥仁

《女子主将挨拶》

　絶対に男女総合優勝できると、このチームらしく強気で向かっていきました。ランキングを守る難しさを感じると共に、チームの目標を達成することの喜びを体感できる対校戦となりました。

　この東大戦をもって引退する部員が多くいますが、上の代の先輩方含め、見て学んだり強くしてもらった部員が残っています。引退した人も私たちの一部となって支え続け、これからも部を強くしていくことと思います。

　この東大戦をもって、松井平松に代替わりを致します。今季の残りの対校戦、そして来季に向けて前に進み続けて参ります。

　最後になりますが、蒼穹会の皆様には当日も多くの方に足をお運びいただいてご声援賜りましたこと、大変嬉しく思います。私たちが引っ張ってきたこの1年間も、日頃から多大なるご支援いただきまして大変励みになりました。ありがとうございました。今後とも変わらぬご支援のほどを何卒よろしくお願い申し上げます。

京都大学陸上競技部女子主将　平岡　雪乃

《監督挨拶》

9/27(金)に、山城運動公園陸上競技場にて、東大戦が行われました。結果は男子 190-182、女子が 37-25 と、目標であった男女総合優勝を達成することができました。

当日は朝から新倉(5)を中心とした東大のトラック陣にランキングを返され、接戦となりました。男子は棒高跳終了時点で同点となり、最後のマイルリレーと三段跳びまでもつれる戦いとなりました。女子においても事前ランキングを落とし、猛追を受けましたが、要所のフィールド種目で勝ち切る意地を見せ、逃げ切りに成功しました。

本大会をもって中川・平岡の牽引する対校戦は終了となります。関西インカレ降格の危機から８位に滑り込み、七大戦、東大戦と優勝した男子、七大戦で 1 点の差に優勝を逃したものの、東大戦では見事に優勝を勝ち得た女子、どちらも一年を通して大きく躍動した一年でありました。勝負事である以上、すべての試合の結果において「全部勝つ」ことは出来ませんでしたが、自分たちの持てるもの「すべてを駆動力に」、最後まで妥協することなく「全部勝つ」姿勢を見せてくれた、素晴らしいチームでありました。

これからは松井・平松による新しいチームが発足します。またさらなる向上を見据えて一年間突き進んでまいりますので、これからもどうぞご支援・ご声援のほどよろしくお願い申し上げます。

京都大学陸上競技部監督　島村　夏惟

②東大戦結果

男女総合優勝

〈男子〉

得点表	京都大	東京大
100m	10	11
200m	10	11
400m	11	10
800m	10	11
1500m	6	15
5000m	7	14
110mH	10	11
400mH	15	6
5000mW	14	7
走高跳	12	9
棒高跳	9	11
走幅跳	13	8
三段跳	12	9
砲丸投	7	14
円盤投	9	12
ハンマー投	8	13
やり投	15	6
400mR	6	2
1600mR	6	2
総合	190	182

〈女子〉

得点表	京都大	東京大
100m	6	4
400m	6	4
800m	4	5
3000m	3	4
走幅跳	7	3
砲丸投	7	3
400mR	4	2
総合	37	25

③東大戦各競技総括

第９７回東京大学・京都大学対校陸上競技大会
第２３回東京大学・京都大学対校女子陸上競技大会
２０２４年９月２７日（金）
於山城総合運動公園陸上競技場

～短距離（短短）～

男子 100m

決勝（＋1.4）
髙田 雄平（4） 2着10“58
山田 慎之助（4） 4着10“74
林 宏太郎（2） 5着11“06

男子100mには髙田（4）、山田（4）、林（2）が出場した。

レースが始まると、序盤から髙田、山田と東大の 2 選手が飛び出した。髙田は大会記録を更新した東大の新倉には及ばずも、PB となる快走で 2 着に。山田は最後まで東大の2番手の選手と競り合ったが、惜しくも届かず 4 着。序盤出遅れた林は東大の 3 番手との争いになるも、後半で引き離し 5 着を守った。

好調の髙田はもちろん本調子でなかった山田と林もそれぞれの役割をしっかり果たしてくれ、東大との点数差を最小限に留めることができた。（角谷）

男子 200m

決勝（＋1.1）
髙田 雄平（4） 2着20“95 NGR 蒼穹新
遠藤 大介（1） 4着21“92
中川 雄稀（2） 5着21“94

男子 200m には髙田（4）、遠藤（1）中川（2）が出場した。

髙田は序盤抑え目に入ったのか少し遅れたようにも感じられたが、直線の 100m 特にラスト 50m は圧巻の走りで 20.95 という驚異的な記録でゴールした。

遠藤は PB とはならなかったものの大会前の目標である「21 秒台で走る」ということを達成し満足できるレースであっただろう。着実に調子を上げていっていることがうかがえる。

中川は PB であり調子も良さげであった。前半 100m は遅れたように思えたが後半 100m の粘りが素晴らしいものであった。

3者ともに素晴らしい走りで京都大学側を強く元気づけた（折橋）

蒼穹新を記録した髙田（4）

男子 4×100mR

決勝
山田（4）-髙田（4）-長田（4）-林（2）
1着40“84

4×100mR には山田-髙田-長田-林が出場した。

同メンバーで挑んだ日本インカレでは DQ となったが、1週間でしっかりと修正して臨んだ。1走の山田と2走の髙田は内レーンの東大を実力通り置き去りに

し、4回生の集大成となる走りを見せた。3走の長田は東大のエース新倉の猛追を受けたが、しっかりと粘って並びで4走にバトンパスした。4走の林は並びでもらった中で焦ることなく自分の走りをし、0．2秒の差をつけて勝ち切った。（田渕）

女子 100m

決勝（＋0．6）
中野 直子（4） 1着12“81
平松 藍（3） 3着13“18

女子 100m には中野（4）、平松（3）が出場した。直前に雨が降り出し、難しい条件のレースになった。

中野は本調子ではなかったものの、スタートから先頭を譲らず 1 着でゴールし、強さを見せた。

平松は普段の走りができず、東大の畠山に差をつけられ3着でゴールした。確実に力はついているのでこれからのレースに期待したい。（瀬戸）

女子 4×100mR

決勝
平松（3）-中野（4）-齋藤（3）-瀬戸（1）
1着49“72

女子 4×100mR には 1 走から順に平松（3）-中野（4）-齋藤（3）-瀬戸（1）が出場した。

女子の優勝は決まっているものの最終種目で良い形で終わらせるプレッシャーのある中、4回生代最後のレースを大事に思って臨み、しっかり繋ぎきった。

平松は成長がよくわかる走りで1走から東大を離してバトンを渡した。中野は 100,400 の疲労の残る中のレースだったが安心感のある走りで東大に隙を見せなかった。齋藤は持ち前のバネのある大きな走りでリードを大きく広げた。瀬戸は強い追い風の中であったが危なげない脚運びで3人の先輩から受け取ったバトンをしっかりゴールに繋げた。（平岡）

～短距離（短長）～

男子 400m

決勝
益田 椋多（4） 2着48“56
川村 拓也（2） 3着49“32
新庄 健（3） 5着50“97

男子400mには益田（4）、新庄（3）、川村（2）が出場した。

益田は前半とばす東大勢に対し冷静な走りを見せる。200m を過ぎて一気に詰める。逆転優勝が期待されたが東大土屋の大ベストに屈し 2 位となってしまう。ただタイムは 48.56、PB でこそないが夏以降の安定感を十分に示した。また土屋に負けたこともマイルへの大きな伏線となった。

川村は1番外側の難しいレーンでありながら淡々とレースを進める。カーブで東大勢や益田に抜かれてしまうが得意の後半でPB48秒台の東大井上を抜き返し3位。タイムはベストを大きく更新し、また久しぶりの 49 秒台となる 49.32。次期エースとしての活躍を期待させるレースであった。

新庄は突然の正補交代であったが冷静に対応。周りに惑わされることなく自分のペースを守る。全体通して無駄な力感なく、後半も綺麗に走りきった。タイムは UB となる 50.97。400mH と共にPBまであと少しであり、練習水準を見るにPB大幅更新も期待される。（岩本）

男子4×400mR

決勝
川村(2)-中川(2)-青柳(3)-益田(4)
1着3‘13“68 NGR

男子 4×400mR の決勝には川村(2)、中川(2)、青柳(3)、益田(4)が出場した。

川村は男子やり投げの直後で疲労も見受けられたが、午前に行われた男子 400m で PB を更新した勢いをそのままに東大とほぼ同時にバトンを渡した。

中川は二種目で大会新記録を樹立した東大の新倉との対決となり厳しい戦いとなることが予想されたが粘りの走りを見せバトンを繋いだ。

青柳は連戦による体の痛みを抱えた状態で臨んだレースだったが序盤からスピードに乗って前の東大との差をみるみる詰めた。300m地点で後ろについたが抜かすことはかなわなかった。

益田は序盤から中盤にかけて前の東大にぴったりとついてレースを進めた。ホームストレートでは、七大戦の男子400m王者の意地を見せ、東大を刺し一着でゴールした。東大戦で引退となる益田にとってこの上ない引退試合となった。

岩本(4)、高橋(3)を欠く中で、対校得点も拮抗しておりプレッシャーのかかるレースだったが、結果としては大会新記録での勝利となり LS パートの強さが十分に発揮されたレースとなった。(吉田)

男女総合優勝を確かなものにしたマイルリレー

女子 400m

決勝
中野 直子(4) 1着60“69
平岡 雪乃(4) 3着61“20

女子400m 決勝には中野(4)、平岡(4)が出場した。

中野は前半、他を圧倒するスタートで大きくリードした。後半でもペースは落ちることはなくラスト100mでさらにリードを広げ堂々の優勝を飾った。

平岡は200m地点で6レーンの宮宇地(1)を抜きシーズンベストという素晴らしい走りであったが最後100mでの競り合いに惜しくも敗れ3位でゴールした。(新美)

～ハードル～

男子110mH

決勝(＋0.0)
五十嵐 聖(4) 2着15“09
柳町 悠斗(1) 3着15“31
杉本 蓮(3) 6着23“27

男子 110mH には五十嵐(4)杉本(3)柳町(1)が出場した。

五十嵐はスタートの飛び出しから10台目を越えてからの追い上げまで優勝を狙う気持ちが溢れるレースであった。4回生の中でも入部時からの伸びが1番といえる選手で、最後まで PB を出し続けた。

杉本は臀部の怪我でハードリングが出来ない中 1 点を取るために出走を決めた。この貴重な 1 点を取ったこと、今後の更なる大きな 1 点 2 点へと繋げてほしい。

柳町は多種目出場の中、それをマイナスに見せることなく精錬され続けるハードリングを見せつけた。どの種目も妥協することなくどんどん強くなっており、今後の活躍が計り知れない。(平岡)

自己ベストで有終の美を飾った五十嵐(4)

男子 400mH

決勝
高橋 昂生(3) 1着51“16 NGR
柳町 悠斗(1) 2着55“01
金盛 圭悟(4) 3着57“11

京大からは柳町(2),高橋(3),金盛(4)が出場した。

大きく離れたタイムを持つ高橋が序盤からレースを引っ張り、全カレでの前半の失敗もしっかりと修正して 9 台目まで大きなミスなくレースを進めた。10 台目で歩数が合わず減速をしたものの見事に大会新でゴール。

前を行く高橋を2番手で追走した柳町も終盤まで上手くレースを進め、ラスト2台で大きく減速してしまったが危なげなく2位を守り来年以降の対校戦も楽しみになる走りを披露した。

金盛は 1 台目でハードルにぶつかってしまい波乱の立ち上がりであったがそこで気持ちを切らさず食らいつき、猛追する東大勢を抑えて 3 位を死守。4 回生としての意地を見せた。

見事最初の種目である 400mH で 2 年連続のスコンクを達成し、京大を勢いづけるレースであった。(青柳)

～中距離～

男子 800m

決勝
杉原 一冴(3) 2着1‘55“78
平山 悦章(4) 4着1‘58“11
阿部 陽葵(2) 5着1‘58“38

男子 800m には杉原(3)、阿部(2)、平山(4)が出場した。

杉原は後方に位置取ってレースをスタートした。ランキング 1 位の東大北岸をマークする形でレースを進めた。ラストスパートで優勝とは行かなかったが、持ち前の安定感のある走りを見せて、2 着となった。

阿部は積極的にレースを引っ張り、果敢に攻める姿勢を見せた。2 周目で位置を少し落とし、持ち味のラストスパートは生かせず、5 着でのゴールとなった。

平山は集団の前方に位置し 1 周目は冷静にレースを進めた。2 周目に入ったところで前に出てペースを上げ得意な形に持っていこうとしたが、ラストの 200m から東大の選手に追い上げられ、4 着となった。

予想された通りのスローペースでそれぞれの強みが活かせず、少し悔しい結果となったが、この経験を糧に今後の対校戦での活躍に期待したい。(西川)

男子 1500m

決勝
西川 洸平(4) 4着4‘06“04
奥村 究(3) 5着4‘11“57
小井 稜真(4) 6 着4‘18“40

男子 1500m には西川(4)、奥村(3)、小井(4)が出場した。

レースはスローな入りとなり集団は 1 周目を 68 秒で通過。2周目の中盤、先頭を走る東大秋吉がペー

スアップし、集団は縦に伸びる。

西川は3番手で粘り続けラストの直線でスパートをかけるも、4番手の東大森に一歩及ばず 4 着でゴール。ラスト勝負ということもあり非常に悔しい結果となった。

奥村は最後尾から冷静に様子を伺い徐々に切り替えるも、前との差を埋めることはできず5着でゴール。

小井は中盤以降、果敢に森に追走するもラスト 1 周で最後尾に後退し、スパートをかけられず6着でゴール。苦しい走りとなった。

格下の相手もいる中、スコンクを許してしまう悔しい結果となった。今後中距離パートが実力を底上げするきっかけとしていきたい。(柴折)

女子 800m

決勝
小倉 唯愛(3) 1着2 ‘24“92
新保 歩(4) 欠場

女子 800 には小倉(3)が出場した。

小倉はスタートから飛び出すと、終始独走し、東大の二選手に大きく差をつけて三連覇を達成した。このレースで京大は 4 点を獲得した。(服部)

三連覇を達成した小倉(3)

～長距離～

男子 5000m

決勝
三嶋 友貴(4) 3着15 ‘31“63
稲田 正裕(3) 5着16 ‘49“98
斎藤 優成(4) 6着18 ‘13“93

男子 5000m には三嶋(4)、斎藤(4)、稲田(3)が出場した。

9月には異例の暑さの中スタートしたレースは 200m まで非常にスローなペースで進んだ。その後 2000m までは1キロ3分程のペースで進んだ。2000mまでに斎藤、稲田は集団から脱落し、東大 3 人と三嶋の争いとなった。動きがあったのはラスト 2 周。東大の選手がペースを上げるも三嶋は着いていくことはできず、単独3位に。そのままレースは進み三嶋は3着でゴール。3年連続のスコンクは阻止した。斎藤稲田も単独で走ることとなり、苦しいレースとなったが、なんとか完走した。(服部)

冷静にレースを進めた三嶋(4)・稲田(3)

女子3000m

決勝
中澤 ひなた(1) 2着11 ‘49“61
髙木 こころ(1) 欠場

女子3000mには中澤(1)が出場した。

東大京大から 1 名ずつ欠場者が出たため、東大とのマッチレースとなった。スタート直後、中澤は積極的な走りで独走するが、1000m 付近で追いつかれ

た。その後は東大の後ろで粘りの走りを見せたが、ラスト一周の勝負で相手に軍配が上がった。ただ、大学初レースが対校戦で、尚且つ数年ぶりのトラックレースにもかかわらず目標としていたタイムで走り切った。今後に期待できるレースだったように思う。（梅原）

～競歩～

男子5000mW

決勝
中村 颯葉(2) 1着20‘51“35
土田 浩生(2) 2着21‘09“41
中田 晴斗(1) 4着22‘14“66

男子5000mWには土田(2)中村(2)中田(1)が出場した。

中村は夏も順調に練習を積めており、実力を存分に発揮し七大戦に引き続きPBでの優勝となった。

土田は直前に足首を痛めており出場が危ぶまれたが、力強い歩きで中村とレースを作り、PBで2着となった。

中田は、直近の故障もあり少し不規則な練習が続いていたが、積極的な歩きで七大戦を上回る結果を残して見せた。しかし、当人には不満が残る内容だったようで今後のさらなる躍進に期待がかかる。（佐向）

～跳躍～

男子走高跳

決勝
山中 駿(4) 1位2m05
田中 颯真(3) 2 位2m00
丹野 啓仁(1) 6位1m65

男子走高跳には山中(4)、田中(3)、丹野(1)が出場した。

丹野は、1.60m から試技を始め、最初の一本目は踏切が潰れてしまい失敗となったが、以降は調子を取り戻し、2 回目で 1.60m を成功、シーズンベストである 1.65m は 1 回目で成功した。1.70m は惜しくも失敗となったが今後の活躍に期待できる跳躍であった。

田中は、1.90m から試技を始め、1.90m、1.95m 共に余裕を持って成功していった。2.00m では 1 回目では失敗となったものの、2 回目では難なく成功していった。最後は、自身の自己ベストである 2.05m に挑戦したが、ほんのあとわずかのところでの失敗となった。今シーズン中の自己ベスト更新に期待がかかる。

9月中旬の全日本インカレで自己ベストを更新して京大新記録を樹立した山中は、怪我の悪化を防ぐために一本の試技だけで優勝を決めた。非常に余裕のある跳躍を行い、更なる自己ベスト更新に期待がかかる一本であった。（北田）

男子棒高跳

決勝
深井 颯一郎(4) 1位3m80
中川 遥仁(4) 4位3m00
吉冨 文暁(3) NM

男子棒高跳には中川(4)、深井(4)、吉富(3)が出場した。

中川は2m40cmから競技を開始すると自己ベストに並ぶ2m80を1回で成功させ、
自己新記録となる3mをクリアし、主将としての意地を見せ4位となった。

深井は3m60cmから開始すると3m80cmを2回目で成功し、見事優勝を果たした。

吉富は4mから開始したが、3本の中でうまく合わせることができず、NMとなり2連覇とはならなかった。（水野）

男子走幅跳

決勝
水野　椋介(1)　1位6m66
松本　良平(4)　2位6m41
松井　和輝(3)　5位6m30

男子対校走り幅跳びには水野(1)、松井(3)、松本(4)が出場した。

水野は夏先以降の勢いそのままに PB を跳び、見事優勝をしてみせた。まだまだ記録は上昇途中であるため次戦にも大いに期待したい。

松井(3)は不安定な風に苦しめられた跳躍となり、本来の実力からしては悔しい結果となった。全体的に纏まってはいたが、それ故に少々無難な動きに収まってしまっていた。もう一歩自分の領域から踏み出した攻めた助走の獲得を課題に今後の練習に取り組んでもらいたい。

松本(4)は七大戦で痛めた左ハムに不安を抱えた中の競技になった。出力の調整に苦しみ五本目までファールが続いたが、最終跳躍で会心の跳躍を見せ二位を奪い取って見せた。今後は怪我の完治を優先し、持ち前のスピードを取り戻して欲しい。

走り幅跳びでは事前ランキングから一点を返し砂場種目に勢いを与えられた。一方でファールの多さが目立ち、選手のみならずサポートの動きにも大いに改善点が見られた。今回の経験を今後に活かしたいところである。(大住)

男子三段跳

決勝
松井　和輝(3)　1位14m11
中川　遥仁(4)　3位13m65
竹生　晴彦(2)　5 位12m86

男子三段跳には中川(4)、松井(4)、竹生(2)が出場した。

松井(3)は午前の走幅跳から調子をあげて 1 本目から 14m 付近を安定して跳び、3 本目には 14m11 を記録して 1 位となった。

中川(4)は 3 本目には 13m65 を記録したが、その後午前の棒高跳びの疲労もありふくらはぎを攣ってしまい調子を上げきれず、惜しくも 3 位となった。

竹生(2)は助走はよく走れており、ファールながら 13m を超える跳躍が見られたものの、合わせ切ることができずに 12m86 で 5 位となった。(松本)

三段跳で優勝した次期主将・松井(3)

女子走幅跳

決勝
新保　歩(4)　1位4m77
齋藤　虹香(3)　2 位4m74

女子対校走り幅跳びには齋藤(3)、新保(4)が出場した。

齋藤は久しぶりの走幅跳の試合にも関わらずベストを更新し、二位を獲得して見せた。助走はまだまだ改善の余地があり、今後は 5m も視野に入れていきたい。

新保は最後の走り幅跳びの試合に見事優勝の二文字を添えてみせた。4m70 付近で安定した跳躍を見せ、右脚の痛みを抱えながらも東大相手に勝ち切った。

両者とも多種目出場の中ランキングを返し、女子チームに勢いを与えた。(大住)

～投擲～

男子砲丸投

決勝
大住 圭樹(4) 3位9m93
小島 伸介(1) 5位7m91
中尾 亮介(1) 6位7m47

男子砲丸投には大住(4)、小島(1)、中尾(1)が出場した。

大住は左足首に怪我を抱えながらも持ち前の力強い投擲を見せつけた。1 投目から 9m 中盤を投げる安定感で、4 投目には 9m93 の PB をマーク。惜しくも 10m 台には届かなったが 3 位を死守した。

小島は円盤選手ながらも砲丸投に意欲的に出場。まだまだ改善の余地はあるが、体格を活かした投擲で 7m91 の PB をマークして 5 位につけた。

中尾はハンマー投との連戦のなかでも 6 投を投げ切った。試合のなかで修正を繰り返したが、7m 後半には及ばず 6 位に終わった。(岡本)

男子円盤投

決勝
岡本 亜哲(4) 3位27m23
小島 伸介(1) 4位22m58
五十嵐 聖(4) 5位21m91

男子円盤投には岡本(4)五十嵐(4)小島(1)が出場した。

途中で雨が降り出し悪天候の中での試合となった。

岡本は練習を十分に積めておらず記録が不安定だった。しかし最終投擲で記録を伸ばした。惜しくも 2 位を逃す結果となった。

五十嵐は他種目出場ながらシーズンベストをマークした。最初 NM が続いたが、落ち着いて試合を進め記録を残すことができた。

小島は七大戦などで見つけた課題をまだ習得しきれていない様子だった。今後に期待したい。(木下)

男子ハンマー投

決勝
岡本 亜哲(4) 3位29m52
中尾 亮介(1) 4位28m39
木下 賀貴(2) 6位17m19

男子ハンマー投には岡本(4)、木下(2)、中尾(1)が出場した。

岡本は七大戦以降あまり練習ができておらず不安があった。しかし 4 年かけて積み上げてきた力は確かなものであり、以前と変わらぬ力強い投げを見せてくれた。四投目に 29m52 をマークし事前ランキング通り 3 位で競技を終えた。引退試合を楽しむことができた。

木下は一投目から自己ベストを更新する投げを見せた。二投目以降はスイングスピードを上げて攻めた投げをしたが上手く噛み合わず、記録を伸ばすことができなかった。6 位で競技を終えた。まだまだ伸びしろがあり今後の成長に期待がかかる。

中尾は試合中に投げを修正できた。その結果五投目に自己ベストとなる 28m39 をマークし 4 位で競技を終えた。今回も持ち前の高い技術力を見せつけた。今後の対校戦での活躍が楽しみである。(篠田)

男子やり投

決勝
木下 賀貴(2) 1位48m33
柳町 悠斗(1) 2 位45m31
川村 拓也(2) 3位44m74

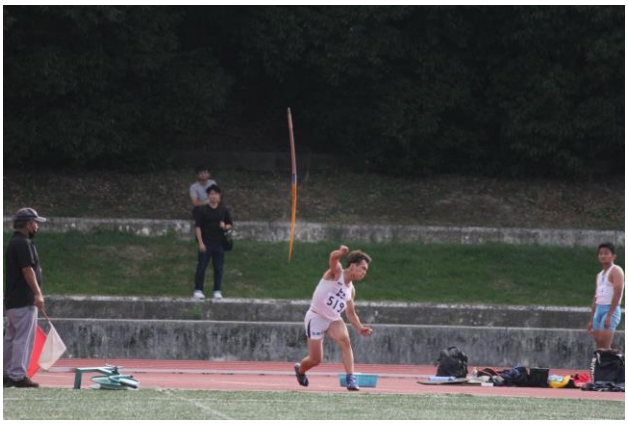
やり投には木下(2)川村(2)柳町(1)が出場した。

木下は東大との勝負よりも高いレベルを目指しての試技となった。自分自身の課題を大きく克服するこ

とはできなかったが、その中でも優勝を早々に決めた。自身の力を最大限出した記録ではないため、来年以降の飛躍に期待したい。

川村は一投目に 44mを投げ、東大よりも上にたつと二本目に PB の投擲をした。その後はマイルリレーのためにパスをしたが、少ない本数で確実に点を取る対校選手として素晴らしい試合運びだった。

柳町は直前に 110mH を走った後の競技になった。一本目がパスとなったものの、徐々に調子を上げていき、川村の記録を上回り二等となった。終盤にスコンクを達成し、勝負を決める種目になった。（眞鍋）



PB に近い投げで優勝した木下（2）

女子砲丸投

決勝

新保　歩（4）　1位8m43

平松　藍（3）　2 位7m10

女子砲丸投には新保（4）、平松（3）が出場した。

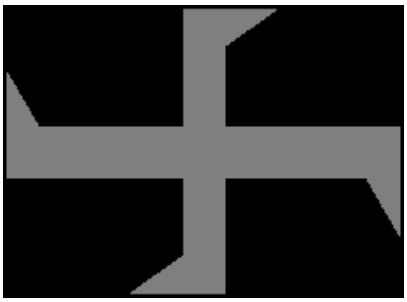
本大会での引退を決めていた新保は、なかなか調子が上がらないなかで立ち投げを選択。7m 台の投擲が続いていたが、6 投目には気合の掛け声から 8m43 を記録し、余裕の優勝を飾った。おめでとう。

平松は短距離選手ながらも出場を決めた。練習通りの投げは再現できなかったようだが、力強いリリースで伸びのある投擲を見せた。自身初にして 7m10 をマークし 2 位。新チームを率いる女子主将として力強さを印象付けた。（岡本）

④ その他ご報告

この東大戦を以て中川主将、平岡女子主将を中心としたチームとしての対校戦は終わりになりますが、この先も京阪神、丹後駅伝と対校戦は続きますので OB.OG の皆様にぜひお越しいただきたい所存です。この度は誠にありがとうございました。最後にはなりますが、今回の東大戦にお越しいただいた OB.OG の皆様を以下に掲載させていただきます。尚、お越しいただいたにもかかわらずお名前がない方につきましては、この場を借りてお詫び申し上げます。

鯉谷忠夫 S41
藤原忠義 S41
森本正幸 S41
井上達朗 S47
沼野正義 S47
池本忠司 S49
桂総一郎 S51
宮下欣二 S51
眞野勝文 S53
重村充男 S54
三好稔彦 S54
熊谷元 S59
沢田和昌 S60
岡野颯斗 R2
藤井萌加 R2
芦田開 R3
澤田剛 R3
中野水貴 R3
本居和弘 R3
藤浦敦士 R6



蒼穹ニュース　令和6年度　第6号
令和6年10月03日発行

発行所：京都大学体育会陸上競技部
編集者：佐向丘（蒼穹ニュース担当副務）
写真担当：濱口姫生・大西智貴・川村拓也

陸上競技部 HP　http://www.athletics.kusu.kyoto-u.ac.jp/
陸上競技部記録 HP　http://www.athletics.kusu.kyoto-u.ac.jp/kiroku.htm
関西学連 HP　http://gold.jaic.org/jaic/icaak/index.htm
メールアドレス　sakoh.kyu.56n@st.kyoto-u.ac.jp（佐向）